

■ 日漢協トピックス



「国民の健康と医療を担う漢方の将来ビジョン研究会2024」 開催

2025年2月17日(月)18時より、KKRホテル東京(瑞宝)において「国民の健康と医療を担う漢方の将来ビジョン研究会2024」が開催された。

今回も、昨年同様、会場参加による開催(限定的にオンラインによる配信)となった。

今回は、会場において、代表世話人、世話人、委員等研究会関係の先生方および厚労省等のオブザーバー、共催の日本東洋医学会、会員会社の方々が74名、オンラインからは、148名が視聴参加し、総計222名の方々が参加した。

今回は、「日本の社会課題と漢方薬の必要性～高齢化(フレイル)少子化(プレコンセプション)～」をテーマとし、講演ならびにディスカッションが行われた。

まず、総合司会の本研究会代表世話人である、鳥羽 研二先生(東京都健康長寿医療センター 理事長)より、開会のご挨拶があった。



【会場の様子】



総合司会
【鳥羽 研二先生】

鳥羽先生は、ご挨拶の中で「フレイル年齢は、ここ最近、5歳も遅れるなど、改善傾向にある。しかし、昨今のコロナ禍により認知症・フレイルに悪影響を及ぼしている。また、伸び続けていた健康寿命も、ここ2年で1.5年も短縮した」などと現状を指摘した。

続いて、講演のセッションに移り、4名の先生方がご登壇された。
各先生方のご講演の概要は以下の通りである。

■講演

➤ 高齢化(フレイル)について

座長: 高山 真先生

(東北大学病院 総合地域医療教育支援部・漢方内科 特命教授)

● 「高齢者大腿骨近位部骨折における人参養栄湯の効能」

～リズムフレイルの改善作用についての検討～

演者: 松本 卓二 先生(国保野上厚生総合病院整形外科部長

高齢者脆弱性骨折治療センター センター長)

松本先生からは、「人参養栄湯は、大腿骨近位部骨折患者の術後の食事摂取の増加を促し、栄養指標を改善することが確認された。また、同製剤は、時間栄養学的に食事摂取と睡眠満足度を改善することから、サーカディアンリズム(身体の生体リズムを調整し、健康的な生活を維持するための体内時計)を整え、栄養状態、ADL改善を促す可能性がある」などと解説された。



座長
【高山 真先生】



【松本 卓二先生】

●「COPD患者の呼吸リハビリにおける漢方の役割」

演者：濱田 泰伸 先生

（広島大学大学院医系科学研究科生体機能解析制御科学 教授）

濱田先生は、ご講演の中で、フレイル・サルコペニアに対する治療法が漢方を含め確立されていない現状をふまえ、「フレイル・サルコペニアに対する漢方治療とリハビリ併用のエビデンスを確立する必要がある。そのために、今後は漢方治療に対するレスポンドマーカ―を確立していかなければならない」と提言された。



【濱田 泰伸先生】

➤ 少子化(プレコンセプション)について

座長：堀江 重郎 先生

（順天堂大学大学院医学系研究科泌尿器外科学 教授）

●「リアルワールドデータを用いた産婦人科漢方研究」

講演：康永 秀生 先生（東京大学大学院医学系研究科

公共健康医学専攻臨床疫学・経済学講座 教授）

康永先生は、「妊娠悪阻の患者に対して、漢方薬は安全に使用でき、西洋薬と比較して予定外入院の減少と有意に関連している。これまでも、リアルワールドデータを用いた産婦人科漢方の効果・安全性に関するいくつかの研究がある。今後、さらに多くの漢方薬使用例について、効果・安全性に関するエビデンスの蓄積が必要である」との考えを述べられた。



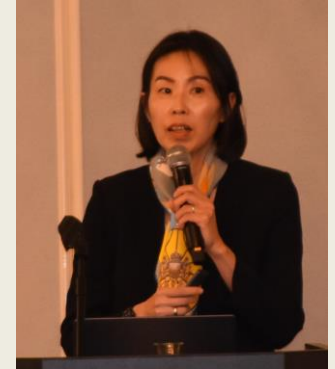
【堀江 重郎先生】



【康永 秀生先生】

- 「産婦人科医療における漢方薬の必要性」～子宮内膜症を中心に～
講演: 甲賀 かをり先生 (千葉大学医学部附属病院産婦人科学 教授)

甲賀先生は、種々の漢方薬が子宮内膜症に関するガイドラインに掲載されている現状や主に当帰芍薬散の同疾病に対する基礎研究結果を紹介された。その上で「漢方は、患者さんの症状や症候を重視し治療を行う、古くて新しい医学。今後、患者中心医療に貢献できる可能性がある」と話された。



【甲賀 かをり先生】

■ディスカッション

講演終了後、代表世話人の鳥羽 研二 先生と世話人の合田 幸広 先生 (国立医薬品食品衛生研究所 名誉所長)のお二人を司会として、ディスカッションが行われ、活発なご発言や意見交換が行われた。



【ディスカッションの様子】



【鳥羽 研二先生】



【合田 幸広先生】

まず、松本 吉郎先生(日本医師会 会長)から、「今回、高齢者のフレイルの意欲や身体活動性の向上へのエビデンスが示された。漢方は医療にとって重要であり、昨今拳がっているOTC類似薬の保険給付見直しのようなことがあってはならない。

今回の件を踏まえ、今後も課題の解決に全力で取り組む」などのご発言をいただいた。

続いて、三谷 和男先生(日本東洋医学会 会長)より「漢方の保険外しは多くの患者さんの医療へのアクセスを阻害し、また、患者さんが自己判断で薬剤を入手することによる相互作用のリスクもあることから、断固反対する」などの意見を述べられた。

次に、東田 千尋先生(富山大学和漢医薬学総合研究所研究開発部門・病態制御分野・神経機能学領域 副所長・教授)は、「フレイルの漢方研究においてRCTの実施が必要である。また、今後のテーマとして、認知機能に関わる神経性フレイルの研究が進むことを願っている」などと課題を呈された。

さらに、岩月 進先生(日本薬剤師会 会長)から、「漢方のエビデンスや漢方理論を薬剤師も学ぶべきである。漢方の保険給付除外については、保険診療の中でこそ漢方の研究の発展があると考えてるので、反対を表明する」とのお言葉をいただいた。



【松本 吉郎先生】



【三谷 和男先生】



【東田 千尋先生】



【岩月 進先生】

河本 滋史先生(健康保険組合連合会 専務理事)の代理としてご出席の松本 真人先生(同連合会 理事)から、「健保連は女性の健康に力を入れているが、一方で、今後は若年男性への漢方の有用性、そして医療経済学メリットに関するエビデンスの集積をお願いしたい」とのご意見を述べられた。

次に、岡田 安史先生(日本製薬団体連合会 会長)は、「漢方・生薬製剤の安定供給に資するべく、薬価による下支え、国内生薬生産の推進、さらにはリアルワールドデータの国際学会での論文化などを進めてほしい」などと要望された。

研究機関から、吉松 嘉代先生(国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所 薬用植物資源研究センター センター長)が、「原料生薬の国内での調達率はもはや10%を切っている。薬用作物産地支援協議会がマッチング活動を行っているが、使用量が増加しているため自給率は上がっていない。今後、国による抜本的な支援が必要な状況となっている」など現状を説明された。

また、伊藤 美千穂先生(国立医薬品食品衛生研究所 生薬部長)は、「化学薬品の舞台であるドラッグリポジショニングの中で天然物薬品を現代の効能へ置き換えることを行っている。今後、リアルワールドデータを活用することで天然物薬品の読み換えが進むかもしれない」と期待感を示された。



【松本 真人先生】



【岡田 安史先生】



【吉松 嘉代先生】



【伊藤 美千穂先生】

最後に、三谷 和男先生より「2017年に本研究会による提言書が発表され、2021年に更新されている。その後、ここ数年来で見えてきた社会課題もあり、漢方の必要性を鑑み、提言内容の更新を行ってはどうか」とのご提案があり、ご出席の研究会メンバーのご賛同を得た。

今後、2026年に開催予定の当研究会に向けて、研究会提言の更新を行うこととなった。

■記者会見

研究会終了後、20時より報道関係者を対象に記者会見が行われ、鳥羽先生、合田先生をはじめ、世話人を含め5名、ならびにご講演された4名の先生方が参加された。

記者の方々からは、OTC類似薬の保険給付除外や研究会提言の進捗状況ならびに今後の更新のスケジュール感について問う等、活発な質問が挙がり、関係する先生方が熱心に対応されていた。



【記者会見の様子】